

人とは共存できなくても、
人とともに歴史を刻んできた
気高い狼を描く。

日本画家 柴田 梓

大学学部時代から一貫して狼をテーマに描き続ける日本画家・柴田梓。これまでに REIJINSHA GALLERY では、彼女が参加するグループ展、2人展、個展を開催しており、今年11月には2回目の個展を控えている。REIJINSHA GALLERY のスタッフが、今年2月の新宿高島屋でのグループ展を終え、11月の個展に向けて制作に没頭する彼女のアトリエを訪ねた。F80号の大作を制作する姿を追いながら、柴田梓の今を探りたい。

— 青い背景に白狼を描く表現は、柴田作品の代名詞になりつつありますね。

柴田 大学院の修了展から描きはじめた組み合わせです。狼そのものよりも、綺麗な青のグラデーションを描くことが一番難しい。私は、水干と岩絵具を混ぜて制作しています。まず全体に水干で色を塗り、徐々に濃淡をつけるのです。その後、岩絵具を混ぜ、再び水干を重ねる作業の繰り返し。皆さん大きな筆を使って背景

を塗りますが、私はやや大きめの平筆を使い、大きな画面でも細かく塗っていきます。白狼を描くうちに白が強くなると背景の青を調節するなど、常に色のバランスを見ながら制作を進めています。

— 柴田さんの作品には、白狼だけでなく、黒色や茶色の狼も登場しますね？

柴田 そうですね。どれも違う難しさがあるのですが、描き慣れているのは白狼です。自然のままの茶色い狼を描く際はとても気をつかいますよ。白や黒は現実

— いつから狼を描かれているのでしょうか？

よりもイメージを強く持って自由な気持ちで描けますが、自然の動物として描く茶色は、忠実に再現します。観察も他よりに必要になりますね。

柴田 2013年、学部3年生の自由課題で描いた『狼』が最初です。あの作品は、「狼を描きたい」という一心で動物園に通い、観察を重ねて描いたものです。狼について知識を得る前の、本当にリアルな気持ちで向き合った作品。だから、今同じように描けと言われても描けません。本当は自然のままの、茶色の狼を今も描きたいのですが、なかなか描き出せずにいます。

— それはなぜですか？

柴田 あの『狼』を描いた後、『遠野物語』など狼に関する書物を読み漁りました。



《古人の山》
130.3 x 160.2 cm
水干、岩絵具、箔、和紙
2018年

狼は神として崇められる存在だったり、異界で遭遇する得体の知れない妖怪のような存在だったりします。信仰と恐怖の面を持つ狼の存在に、想像力を掻き立てられました。海外の書物には、家畜を殺された農家と動物保護の争いの内容が書かれていることも多いです。私はどちらの気持ちも分かるし、今のよう情報容易に得られる環境に身を置いていること、果たして私の描きたい「狼」とは何だろうと思うなど、狼に対しての考え方は常に動いています。狼と人は、常に境界を争っていて、境界に接しているように思います。生活のテリトリーが被っているからこそ、悲劇が起きる。狼のことを知れば知るほど、描きたい狼にオリジナリティを出さなければならぬ段階にきています。だと考えさせられます。

— 私生活では犬を飼われているようですが、犬の祖先は狼だと言われています。

柴田 海外のコンピニによく犬がいるの

